

白山火山の歴史時代の活動に関連ある史料（再考）

東野 外志男 石川県白山自然保護センター

THE DOCUMENTED RECORD OF THE HISTORIC ACTIVITY OF MT. HAKUSAN (REAPPRAISAL)

Toshio HIGASHINO, *Hakusan Nature Conservation Center, Ishikawa*

はじめに

東野（1989）は古文書に記された白山火山の活動に関連ある史料を収集した。史料の内容に正確を期すため、それぞれ出典にあたりその内容を確認した。従来の文献で白山火山の活動に関連あるとされていた史料でも、出典が確認できない場合や、出典とされた書に同じ内容の記事を見いだすことができなかったものは、東野（1989）では取り上げなかった。その後、東野（1989）で収集された史料のなかに、白山火山の活動に関連あるとするには疑わしく再考が必要なものや、白山火山の活動に関連ある史料として新たに加えたらよい史料が収集されたので、以下にそれらについて記す。本論で使用した史料の出典については、脚注として文末に一括して示した。

仁寿3年（853）・貞観元年（天安3年，859）の記事

『日本文徳天皇実録』⁽¹⁾ 卷第五の仁壽三年冬十月己卯の条に、“^{廿三}己卯。加賀國白山比咩神從三位。”の記事が、『日本三代実録』⁽²⁾ 卷第二の貞観元年己卯春正月廿七日甲申の条に、“加賀國白山比女神正三位。”の記事がある。同じ内容の記事は、『類聚国史』卷第十四と卷第十五にも記されている（東野，1989）。東野（1989）はこれらの史料に記された白山比咩（女）神の叙位を、間接的に白山火山の活動を示すと解釈可能な記事として取り上げた。大森（1918）はこれらの記事を、“或ハ白山ガ噴火セシヲ示スニ非ザランカ。”と記しており、東野（1989）はその考えをほぼ踏襲した。

伊藤（1977）は“地震や火山の噴火を神わざとし

て神に陳謝するしきたりは、天皇親政の時代に限られていたのだろう。とくに、火山の神の叙位については、九世紀なかばの五〇年近くのあいだにしか記録が見られないのである。”としている。東四柳 史明氏も“火山が噴火すると、朝廷は山の神に対して神階を与え直し、昇進させていた。噴火を山の神の怒りとみなし、それを鎮める目的だったのでしょうか”と述べるとともに、“（白山比咩神の）『正三位』の時は二百六十七の神が一斉に昇進したが、その前の『從三位』は単独での昇進。白山で何らかの火山活動があったと考えても不思議でない（カッコ内著者加筆）”（北國新聞社編集局編，2004）として、貞観元年の正三位への叙位を火山活動に関連あると解釈するには否定的である。『日本三代実録』の正三位への叙位の記事は、“京畿七道諸神進階及新叙。惣二百六十七社。”の後に他の266社と共に記されている。『日本文徳天皇実録』の從三位への叙位が記してある条には、他に叙位とは関係のない2つの事項が記されている。両者とも、それらについて特に理由は記されていない。

東野（1989）は仁寿3年と貞観元年の叙位に関する記事を白山火山の活動に関連あると解釈可能なものとして扱ったが、東四柳氏が述べているように、貞観元年の正三位への叙位は、仁寿3年とは異なり266神と共になされておられ、仁寿3年の從三位の叙位に比較して白山火山の活動と関連あるとするには論拠が乏しい。傍証がない限りは、正三位の記事を白山火山の活動に関連あるとするには、慎重に扱うべきである。また、仁寿3年の從三位への叙位は、白山火山の活動を鎮めるために行ったと解釈可能であるが、他の解釈も可能で、参考程度に扱うべきものと思われる。

天文16年(1547)と天文17年(1548)の 2月3日の記事

天文16年2月3日に白山が活動したという記事がある(東野, 1989)。それは『続史愚抄』⁽³⁾ 四十八の天文十六年大歳丁未二月三日乙酉の条に記された“三日乙酉。加賀白山焼出云。”の記事で、『年代略記』をもとにしている。大森(1918)にも、『地学協会報告』を引用として“天文十六丁未年二月三日加賀白山噴火。”の記事がある。『地学協会報告』以外は典拠を示していないが、『東京地学協会報告』の河井(1889)の「日本火山噴火調」をもとにしたと考えられる。「日本火山噴火調」には、天文16年の記事として“二月三日加賀白山噴火ス”があげられ、『続史愚抄』からの引用としている。『続史愚抄』は柳原紀光が編修したもので、正元元年(1259) 亀山天皇の践祚から安永8年(1779) 後桃園天皇の崩御までの朝廷の通史で、寛政10年(1798)に完成したとされる(加藤・由井編, 2000)。東野(1989)は『続史愚抄』が典拠としている『年代略記』の調査を行っていない。今回、新たに『年代略記』の調査を行ったが、該当の記事は確認できていない。『補訂版 国書総目録 第六巻』(岩波書店編, 1990a)によると、『年代紀略』の別称として『年代略記』が載せられているが、国立国会図書館や京都大学附属図書館谷村文庫、東京大学史料編纂所が所蔵の『年代紀略』⁽⁴⁾の天文年間の条には該当の記事はない。国立国会図書館と京都大学附属図書館の史料は同じ慶長年間(1596～1615)版とされる(岩波書店編, 1990a)。東京大学史料編纂所の史料には、“安田善之助氏所蔵 大正八年十一月寫了”の奥書があり、内容は慶長年間版とほぼ同じで、慶長年間版を謄写したものと考えられる。ただし、わずかであるが、謄写漏れや新たに加えた部分(他の史料からの転写?)がある。

天文16年2月3日については、森田(1929)・日置(1956)・玉井(1957)は、『倭漢合運』の天文十七年戊申の条に“去年二月三日白山焼出”と記されているとしている。『補訂版 国書総目録 第八巻』(岩波書店編, 1990b)によると、『倭漢合運』は『倭漢皇統編年合運図』の別称の一つで、『倭漢皇統編年合運図』は版本としては、慶長5年(1600)の古活字版以降、様々な年代のものがある。今回、早稲田大学図書館所蔵で古典籍総合データベースとして公表されている『指掌倭漢皇統編年合運図』

(『倭漢皇統編年合運図』の別称の1つ)4冊のうち、享保年間(1716～1736)版とされる『指掌倭漢皇統編年合運図』⁽⁵⁾の天文十七の条に“去年二月三ニ白山焼”が記されていることを確認した。この書は元禄七年(1694)に改正したとされる。ほかの3冊の『指掌倭漢皇統編年合運図』⁽⁶⁾は正保2年(1645)版とされる同じ版本で、これらには該当の記事は記されていない。また、金沢市立玉川図書館藤本文庫の『訂補 和漢合運図』⁽⁷⁾(『倭漢皇統編年合運図』の万治元年(1658)版とされる(岩波書店編, 1990b))や米沢市立図書館興譲館文庫の『訂補 和漢年代記』⁽⁸⁾(『倭漢皇統編年合運図』の万治3年(1660)版とされる(岩波書店編, 1990b))にも該当の記事は確認できなかった。享保年間版とされる『指掌倭漢皇統編年合運図』の天文十七年の条の記事は、後になって加えられたと推察される。

森田(1929)は後述するようにその内容の信頼性に疑いを持っているが、『菅家見聞集』に天文17年(1548)の白山の噴火に係る記事が記されているとしている。今回、『菅家見聞集』の天文17年に天文16年と同じ2月3日に白山が活動したという記事を確認した。さらに、『政鄰記』にも白山が天文17年に活動したと記されている(宇佐美 孝, 私信)。金沢市立玉川図書館加越能文庫の『菅家見聞集』⁽⁹⁾の天文十七戊申歳の条には“一 二月三日白山焼出”, 日本銀行金融研究所貨幣博物館の『菅家見聞集』⁽¹⁰⁾の天文十七戊申歳の条には“一 今年二月三日白山焼出ル”と記されている。『政鄰記』⁽¹¹⁾には“天文十七戊申歳二月三日白山焼”と記されており、『菅家見聞集』と同じ内容である。森田(1885)の『加能越書籍一覧 四』によると、『菅家見聞集』は出口政信(宝永2年(1705)4月3日に没する)が、天文7年(1538)の前田利家の誕生から前田家五代目当主前田綱紀の貞享元年(1684)に至る間の主に加能越三州の事実を編年に輯録したものである。『政鄰記』は天文7年(1538)から文化11年(1814)までの加賀藩の史実を記録したもので、加賀藩士津田政隣(文化11年(1814)に59歳で没する)の編著である(日置, 1956)。『政鄰記』の典拠は不明であるが、著者等の没年から、『菅家見聞集』の記事を参考にした可能性も考えられよう。

天文16年2月3日については『倭漢皇統編年合運図』や、典拠とされる『年代略記』は確認していないが『続史愚抄』に、天文17年2月3日については『菅家見聞集』と『政鄰記』に、白山が活動したこ

とが記されているが、天文16年と天文17年の同じ2月3日に白山が活動したということは一般に考えにくく、いずれかの記事が年を誤っている可能性が高い。森田（1929）は『倭漢合運』の記事が正しく、『菅家見聞集』の記事は“誤りへし”としているが、理由は示していない。いずれの年が正しいかは、『年代略記』の調査も含めて、今後検討が必要である。

寛永17年（1640）の記事

長滝寺所蔵の『莊嚴講執事帳』⁽¹²⁾（東野（1989）はこの長滝寺所蔵の『莊嚴講執事帳』を『長滝寺莊嚴講執事帳』としたが誤りで、正式名称は『莊嚴講執事帳』である。岐阜県の重要文化財に指定されている。）の寛永十七年庚辰の条に以下の記事があり、東野（1989）は白山火山の噴火を示すものとした。その記事は、“辰ノ六月十五日酉ノ下剋方月有明ニ赤光ス、諸人不思議スル処ニ、白山大汝方長瀧寺迄、ハイ二夜三日ノ内ニ三寸ホトフリタマル也、其内惣天赤光スル也、不思議多事也、^(議)経聞坊慶祐書留也、”（^(議)は編集者による注記）である。岐阜県郡上市白鳥町にある長瀧寺（長滝寺）は、白山山頂部の大汝峰（2,684m）の南南東約30kmに位置し、その間に三寸程降り溜ったハイ（灰）を、白山の噴火による火山灰と解釈した。白鳥町教育委員会編（1976）によると、『莊嚴講執事帳』は莊嚴講の執事当番帳で、宝治2年（1248）から慶応4年（1868）にいたる約600年間の執事名を毎月にわたって記載している。白山の莊嚴講は毎月4～5日、朝夕二座法華経を購読するもので、白山三馬場における主要行事として鎌倉時代に盛行をみたらしい。上記の記事は、寛永十七年庚辰の条の一月から十二月まで順に執事が記されているところで、七月と八月の執事名の間に記されている。この記事は経聞坊の慶祐が直接観察した、もしくは他からの情報で、史料の性格から、その事象を観察してそれほど時を経ずに書き留めたものと考えられる。

東野（1989）は『莊嚴講執事帳』の記事は“自焼”や“焼出”のような直接に噴火を示す表現ではないが、後述する『正事記』の記事を承知していなかったこともあり、大汝峰から長瀧寺まで灰が積もったことを白山火山の活動によるものと解釈した。『正事記』巻一には、同じ日に同様な異変が諸国で起き、その異変は蝦夷松前辺の山（北海道駒ヶ岳）の噴火によるものであると記されており、『莊嚴講

執事帳』の記事を白山の噴火によるものとするのに疑義が生じ、検討が必要となった。

『正事記』⁽¹³⁾巻一の記事は、“一、寛永十七庚辰六月十五日の夜、天光色して赤かりけるが、夥敷き灰、国々へ降り候。翌十六日の朝、諸人見て、不思議の事に申しけり。後人々申しけるは、蝦夷松前辺の山崩れ、海に入りける由成るが、又海中にも俄に山の出来たりといふ。定而崩れたる山の事なるべし。山には硫黄有る故に、焼上る勢にて岩石をも吹上げ飛ばするによつて、其岩ども落つる音冷じき事なり。灰は猶以て国々へもちるべしといへり。此年諸国にて、牛多く死す、国々、作もあしく候。”である。『正事記』は尾張藩最古の随筆といわれ、著者は尾張藩士の津田藤兵衛房勝（寛永6年（1629）～元禄14年（1701））で、『正事記』を書き終えたのは寛文5年（1665）頃という（尾崎，1964）。この記事は、寛永14年（1637）から寛文元年（1661）までの記事を日付順に記した部分で、寛永16年の「千代姫君様御輿入」の記事の後に記され、すぐ後は寛永19年の「夏過ぐるまで大干魃ほか」の記事である。これらの記事は年月の間隔が広く、寛永17年は著者8歳の頃で、この記事は異変後間も無くして書き留めたものではなく、かなり後になって記したものと考えられる。そのため、内容について注意を払う必要がある（石橋，1995）が、観察された異変が、『莊嚴講執事帳』と『正事記』の両史料で表現は多少異なるが、天が赤くなり、多くの灰が降り積もったという内容で一致し、異変が起きた年月や時刻もほぼ同じである（年月は両史料とも6月15日で、時刻については、『莊嚴講執事帳』では“酉ノ下剋方月有明ニ”に、『正事記』では“夜”となっている）ことや、一方の史料がもう一方の史料を元にしたとはそれぞれの成立や記事内容から考えにくいので、両史料に記されていることがらは信頼にたると解釈される。

この異変に対して、『正事記』では“蝦夷松前辺の山”の活動によるものとしている。渡島半島南端に位置する松前附近の活火山は、北海道駒ヶ岳と恵山である。恵山は18世紀中頃と19世紀中頃の噴火記録があるが17世紀の記録はない（気象庁編，2005）。一方、北海道駒ヶ岳は寛永17年6月13日に活動が始まり、『正事記』に“蝦夷松前辺の山崩れ、海に入りける由成るが”などと記されているように、山体崩壊が起き、山体崩壊による岩塊が海に達していることから、“蝦夷松前辺の山”は北海道駒ヶ岳をさ

すことに疑いはない。吉本ほか (2007) によると、寛永17年6月13日に始まった活動は、最初山体崩壊が起き、その後プリニー式噴火に移行し火砕流が発生している。岩屑なだれは海まで達し、津波を発生し、700人余りの人が溺死したとされる。また、音波探査によって海中に流れ山が確認されている。この噴火は最初の3日間が激しく、その後も小規模な噴火が断続し、約70日後に終結したとされる。

武者 (1941) や村山 (1978) に記されている寛永17年の北海道駒ヶ岳の噴火史料のなか (『津軽一統誌』・『俗事日記』など) には、降灰は津軽地方のみならず越後まで届いたと記しているものがあるが、長滝寺がある美濃まで降灰があったという記事はない。寛永17年 (1640) に白山が活動したとする史料が他で見つかれば別として、上述したように寛永17年の『莊嚴講執事帳』の記事は北海道駒ヶ岳の噴火によるものと解釈するのが妥当である。この記事をもとにすると、越後からはかなり離れているが長滝寺 (美濃) にも北海道駒ヶ岳の噴火による降灰があり、従来いわれているより広範な地域に北海道駒ヶ岳の降灰があったことになる。

万治2年 (1659) の記事

この年に白山が活動した記事として、東野 (1989) は『混見摘写』と長滝寺所蔵の『莊嚴講執事帳』に記されている以下の史料を取り上げた。『混見摘写』⁽¹⁴⁾ には、万治2年の白山の活動について、“當^(万治二年)亥ノ二月晦日大なり仕候、白山に灰ふり事、”と、“同^(夜二)六月五日朝晩入、なり申候時分、別山にて南北にあたり黒雲出る、其内より長き壺丈計法師三人見へ申候、” (万治二年) は著者の注記、(夜二) は異本) の記事がある。『混見摘写』は二十冊からなり、著者は加賀藩士吉田守尚で、寛保元年 (1741) から安永4年 (1775) までの35年間に輯録したもので、織田・豊臣・徳川・前田その他諸藩の武事・奇談・古人の評論を載せ、加越能古戦場の事実も多く記されている (日置, 1956)。上記の『混見摘写』の記事は十八冊に載せられており、“今度白山大なり御尋に付申上候事” という事書と、“右之分、牛首村風嵐村に罷在申候者とも承申、地こく大空に唱申様子覚候由、御座候、以上、万治二年六月九日、右品と寄合所へ書上申候” の奥書がある。“白山の大なり” の御尋ねに対して答えたもので、これらの記事の他に、慶長4年 (1599)・慶長5年 (1600)・正保2年 (1659)・慶安元年 (1648)・寛

永17年 (1640)・万治元年 (1658) などの記事も報告されている (東野, 1989)。『混見摘写』の成立年代からいって、これらの記事は他の史料をもとにしたと考えられる。

長滝寺所蔵の『莊嚴講執事帳』⁽¹²⁾ 万治二年己亥の条には、“六月八日巳の刻計ニ、御山御厨之池ニ上ニ黒雲少計出、暫有而ヲヒタ、敷鳴テ後、彼雲ノ内方坊主之行躰ニテ三人頭ヲ双テ脇方上ヲ顕ス、室々ノ別当何茂是ヲ拜、不思儀ニ思処ニ、其時節三州ハズ村之道者六人参会、是ヲ奉拜、則御来向ト思奉拜、モトユイヲ払ヒ下山スル也、是ハ御来向ニテハアラサル也、其後日々夜々御山之ヲヒタ、布ナル事不知度、近国ニ響也、同其夜月サヘテ青天成ニ、月躰方三筋三方へ御光立テ、其内一筋ノ御光甚光、暫有テ消失ス、一、同六月十八日方廿日迄、越州一国中アシ毛馬ノ降也、慶祐書留也、” ((議)) は編集者による注記) の記事が記されている。

東野 (1989) が示した万治2年の白山火山の活動に関連した記事は以上であるが、『正事記』⁽¹³⁾ 卷二に万治2年に白山火山が活動したと思われる記事が記されている (石橋 克彦, 私信; 日本火山学会・史料火山学GWニュースレター『歴史噴火』第1号 (1994) で紹介)。その記事は、“一、亥 (万治二年) 六月三日の朝、丑寅の方に当りて雷鳴のごとく暫く轟き、当地家動き地響き渡る。美濃・三河・遠江の沙汰にも、響音同じ様に語る。説々有之、慥ならず。後聞に、加賀国白山の嶽焼立ち崩れける。其響と云ひならせり。加賀国白山権現ハ、下の社ハ伊弉册尊、上の社は菊理姫と云々。白山比咩神社とて、加賀国の一宮にてまします。石川郡の内なり。日本記神名帳に見へたり。仏氏の説に、地獄の沙汰を申す。仏道の地獄の説、不審き事なり。神書にもたれる儀は、取りがたし、能々尋ね弁へて参詣すべし。” である。

白山は尾張のほぼ北方約110kmに位置し、この記事で雷鳴のような音がしたという丑寅 (北東) の方向ではない。石橋が指摘しているように、尾張の北東約200kmには浅間山が位置し、この記事の異変が起きたのとほぼ同じ頃 (万治2年6月5日) に、浅間山が活動したという記事“卯剋、大焼、山鳴大に響 (信濃国浅間嶽記)” (武者, 1941) があり、『正事記』の記事が浅間山の活動を示している可能性もある。しかしながら、『正事記』のこの記事の前に四月二十二日、三月十五日・九日・五日・四日・

三日の記事が、後には六月九日・十二日・十四日・十六日、七月六日の記事が日記風に綴られており、この記事はそれほど日を経ずして書き留められ、当時、この異変の原因が“加賀国白山の嶽焼立ち崩れける”によるということが、一般にいわれていたことや、上述したように『混見摘写』や『莊嚴講執事帳』に日付が多少異なるが同月（6月）月上旬に白山が活動したことが記されており、『正事記』に記されている異変を、そこに記されているとおりに、白山の活動によるものと理解するのが無理のない解釈と考えられる。方角については、何らかの誤りであろう。ただし、『正事記』の記事が浅間山の活動を示している可能性を全く否定するものでもない。

6月上旬の異変は『正事記』では6月3日、『混見摘写』では6月5日、『莊嚴講執事帳』では6月8日に起きたことになっている。この三史料の日付のずれについては、いずれかの史料に日付の誤りがある、際だった活動が3度（3日、5日、8日）あった、もしくは、それぞれの史料で記されている現象が異なっていた（例えば、噴火や山崩れなど）など考えられるが、明らかではない。この時期連続して白山の活動が続いたと解釈することも可能である。『正事記』によると、この白山の活動で尾張で地響きがあり、響音が美濃・三河・遠江にあったという。水平距離にすると白山から100kmを越えるこれらの地域にも、このような異変があったということは、万治2年の白山の活動が激しかったことを示しているのかもしれない。

摘 要

東野（1989）で収集された白山火山の活動に関連ある史料のうち、再検討が必要なものや、新たに加えてよい史料を整理した。検討したものは、仁寿3年（853）・貞観元年（859）、天文16年（1547）・天文十七年（1548）の2月3日、寛永十七年（1640）・万治二年（1659）の記事である。

謝 辞

『正事記』の万治2年の記事は神戸大学名誉教授の石橋克彦氏が、『政鄰記』の天文17年の記事は金沢市立玉川図書館近世史料館の宇佐美 孝氏が教えてくださった。白山市立松任図書館の竹田晴絵氏と石川県立図書館史料編さん室の室山 孝氏、宇佐美孝氏は資料収集についてご協力をいただいた。室山氏は草稿全体を、宇佐見氏は草稿の一部を読んで、

ご意見をいただき、本稿の改善に役立った。以上の方々に、謝意を表す。ただし、本報告に誤りがあるとすれば、全て著者の責任である。

文 献

- 日置 謙（1956）改訂増補 加能郷土辞彙. 1042p.
東野外志男（1989）白山火山の歴史時代の活動に関連ある史料. 石川県白山自然保護センター研究報告, 16, 1-8.
北國新聞社編集局編（2004）霊峰白山. 315p, 北國新聞社.
石橋克彦（1995）江戸時代の首都圏直下型被害地震の見直し 1. 1646年12月7日（正保3年11月1日）の地震は江戸被害地震ではなかった. 地震 第2輯, 48, 113-115.
伊藤和明（1977）地震と火山の災害史. 283p, 同文書院.
岩波書店編（1990a）補訂版 國書總目録 第六卷. 869p, 岩波書店.
岩波書店編（1990b）補訂版 國書總目録 第八卷. 859p, 岩波書店.
加藤友康・由井正臣（2000）日本史文献解題辞典. 1364p, 吉川弘文館.
河井庫太郎（1889）日本火山噴火調. 東京地學協會報告, 第11年第1号, 3-46. [復刻版, 『東京地学協会報告 15 第11卷』所収, 1991, ゆまに書房].
気象庁編（2005）日本活火山総覧（第3版）. 635p, (財)気象業務支援センター.
森田平治（1885）加能越書籍一覽 四. 金沢市立玉川図書館加越能文庫.
森田平治（1929）白山神社考卷一. 17p, 白山比咩神社叢書, 國幣中社 白山比咩神社編 [復刻版, 『白山比咩神社叢書』所収, 1980, 名著出版].
村山 磐（1978）日本の火山 (I). 315p, 大明堂.
武者金吉（1941）増訂大日本地震史料. 945p, 文部省震災豫防評議會.
大森房吉（1918）日本噴火誌 上編. 236p. 震災豫亡調査會. [復刻版, 1973, 稔書房].
尾崎久弥（1964）「正事記」解題. 名古屋叢書 第二十三卷 隨筆編 (六). 434p, 名古屋市教育委員会.
白鳥町教育委員会編（1976）白鳥町史 通史編 上巻. 828p, 白鳥町.
玉井敬泉（1957）白山の歴史. 70p, 石川県.
吉本充宏・宝田晋治・高橋 良（2007）北海道駒ヶ岳の噴火履歴. 地質学雑誌, 113, 補遺, 81-92.

出 典

- (1) 『新訂増補 國史大系 第三卷 日本後紀・續日本後紀・日本文徳天皇實録』: 黒板勝美・國史大系編集會編, 吉川弘文館発行, 1966.
- (2) 『新訂増補 國史大系 第四卷 日本三大實録』: 黒板勝美・國史大系編集會編, 吉川弘文館発行, 1966.
- (3) 『新訂増補 國史大系 第十四卷 續史愚抄 中篇』: 黒

- 板勝美・國史大系編集會編, 吉川弘文館発行, 1966.
- (4) 『年代紀略』: 国立国会図書館所蔵, 国会国立図書館電子図書館デジタル資料古典籍資料 (貴重書等), <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2532146>.
- 『年代紀略』: 京都大学付属図書館所蔵 谷村文庫, 京都大学電子図書館, <http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/t110/image/1/t110s0036.html>.
- 『年代紀略』: 東京大学史料編纂所所蔵.
- (5) 『指掌倭漢皇統編年合運図』: 早稲田大学図書館所蔵, 早稲田大学図書館古典籍データベース, http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ri07/ri07_01352/index.html.
- (6) 『指掌倭漢皇統編年合運図』: 早稲田大学図書館所蔵, 早稲田大学図書館古典籍データベース, http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ri07/ri07_05506/index.html.
- 『指掌倭漢皇統編年合運図』: 早稲田大学図書館所蔵, 早稲田大学図書館古典籍データベース, http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ri07/ri07_05625/index.html.
- 『指掌倭漢皇統編年合運図』: 早稲田大学図書館所蔵, 早稲田大学図書館古典籍データベース, http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ri07/ri07_01947/index.html.
- (7) 『訂補 和漢合運圖』: 金沢市立玉川図書館所蔵 藤本文庫.
- (8) 『訂補和漢年代記』: 米沢市立図書館所蔵 興讓館文庫.
- (9) 『菅家見聞集』: 金沢市立玉川図書館所蔵 加越能文庫.
- (10) 『菅家見聞集』: 日本銀行金融研究所貨幣博物館所蔵, 日本銀行金融研究所貨幣博物館デジタル資料, <http://www.imes.boj.or.jp/cm/digitalroom/komonjo/001005/016/910172/html/index.html>.
- (11) 『政鄰記』: 金沢市立玉川図書館所蔵 加越能文庫.
- (12) 『白山史料集 下』: 能島紘一・伊林永幸編, 石川県図書館協会発行, 1987
- (13) 『名古屋叢書 第二十三卷 随筆編 (六)』: 名古屋市教育委員会編, 名古屋市教育委員会発行, 1964
- (14) 『混見摘写』: 金沢市立玉川図書館所蔵 加越能文庫.